

清末の「種族」論とナショナル・アイデンティティ

The View of 'Race' in the Late Qing Dynasty and National Identity

區 建英*

要旨

小論はナショナル・アイデンティティの視点から、清末期の国民国家形成の模索に現れた「種族」論を考察する。「種族」論が発生した当時の歴史的背景として、西洋の侵略と人種差別論を指摘し、またその文化的背景として、中国伝統の流れの一つである「華夷の弁」の観念を語った。諸民族が緩やかな関係で共存した伝統的な天下社会のあり方を変えて、一つの統合した国家を形成するのは、当時の緊迫課題であった。統合国家としてのナショナル・アイデンティティをどこに求めれば、中国の人々が凝集するのか。その拠り所について、国民、「種族」、文化など多岐に分かれて模索された。その中で、「種族」論が辛亥革命の動きを主導したため、本研究は「種族」論に焦点をあて、他の考え方も関連しながら、その様相、特徴、変化を解明する。

目次

はじめに
一、進化論と人種論
二、人種と文化をめぐるアイデンティティの確認
三、民族主義と「種族」革命としての排滿
四、嚴復の思想との応酬
結語にかえて

はじめに

19世紀末の中国において、中国の知識人は自らの人種の源を探るという風潮が盛んであった。その背景には、黄色人種を劣等として差別する西欧の人種論が蔓延していること、また、日清戦争後に生じた亡国滅種の危機意識につれて近代国家の形成が模索され始めていることがあった。もとより中国人種の源を探る風潮は、単に西欧の人種差別論に反駁するためだけではなく、列強の侵略への抵抗と自らの国家形成に伴ってアイデンティティを確認し、中国人としての自信を樹立するためであった。

その風潮において、人種・民族という言葉とともに、「種族」という言葉が頻繁に現れた。「種族」は基本的にethnic groupという意味で使われていた。しかし、氏族や部族の概念として使われたり、逆に人種や民族の概念として使われたりするという混用状態もあり、また、「種」と「族」を区別して使用する場合もあった。そこでは、人類学から見た人種の特徴ばかりでなく、社会学から見た先祖の共同性も文化習俗の共同性も重視されていた。中でも特に強調されたのは、文化要素ないし文明性である。

一、進化論と人種論

近代中国において、亡国滅種という危機意識を最初に提起したのは嚴復である。ところが、嚴復は国家形成の理論構築において、むしろ「種族」とは違った国民という視点から国家を考えた。したがって、「種族」を軸とするような、辛亥革命に至るまでの国家形成運動を主導した民族主義に反対した。そのため、同時代人からも後世からも、民族主義の欠如として批判された。このような嚴復が滅種の危機意識を促したのは、西欧の人種差別主義 (racism) が広がったという背景だけでなく、中国思想の流れの一つである華夷優劣の観念が強靱に存在した(1)からである。

華夷優劣という尊大意識はアヘン戦争後の中国の社会変革を妨げ続けてきた。中国歴史上、異族による侵攻や征服も多かったが、中国が滅亡せず、逆に侵攻してくる異族が中国の文化体系に組み込まれたという過去の経験を経験を理由にして、アヘン戦争後の危機を無視し改革を拒み続けた守旧的な知識人が多かった。清末の中国は

*OU, Jianying [情報文化学科]

社会内部に深刻な問題が存在し、民の「智」も「徳」も「力」も廃れているにもかかわらず、なお自らを「孔孟の教や礼義の治を受け秀傑が集まっている冠帯の民」と自任する。(2)早くも1895年頃から、嚴復はこの実態に対する憂慮を示した。このような尊大意識を打ち破るために、彼はダーウィンの進化論における生存競争の理論を紹介し、人間社会についても各々自存のために争っていることを指摘し、「その初めは種と種が争い、群(社会)や国を形成してからは、群と群が争い、国と国が争い、弱者が強者に食われ、愚者が智者に酷使される」という冷厳な現実を語った。(3)彼は当時の状況を社会と社会、国と国の争いと認識しているが、「種族」を軸として華夷優劣の意識を固持する中国の伝統的思考と、世界に蔓延る西欧の人種差別主義に直面して、人種という観念を用いる論法を取った。

そこで、華夷優劣の意識に反論するために、嚴復は世界の人種に関する知識を説明した。人類学の観点から、世界には黄・白・赤・黒という四つの人種に大きく分けられることを紹介し、守旧者が指す「異族」を「非異族」とし、「満、蒙、漢人は皆黄種である」と主張した。また、各人種の競争における強弱の性質と状況を次のように分析した。競争には「力の荒々しい強さ」と「道徳と知恵の強さ」がある。前者は「力をもって勝つもの」であり、後者は「文をもって勝つもの」である。過去に接触した周辺の民族は前者に属し、したがって、中国は道徳をもってその荒々しい力に勝つことができた。しかし、今日の西洋と昔の周辺民族とを同日に論じてはならない。西洋は「力」(富強)も強ければ、「文」(道徳と法制と学問)も勝っている。しかも、西洋において、「力」を支える「文」は日増しに発展している。これに対し、今の中国においては、道徳も独創的知恵も廃れている(4)。

『天演論』の評語においても、「物競天択」、「適者生存」の理論を紹介し、その地で本来の最適宜の種もかつて経験しなかった新しい種と競争する場合、なお最適宜か否かは分からないと述べ、アメリカの赤種人やオーストラリアの黒種人が日に日に消滅に向かって実態を取り上げ、華夷優劣論を批判した(5)。また、1898年に書いた「保種余義」も、種の競争と優勝劣敗というダーウィンの理論を説明しつつ、白人の世界征服の現実を指摘し、中国の危機的状態を警告した。黒種、赤種が黄種より先に滅ぼされるのは、黄種が広い土地に住み人口が多いからであるが、白人の勝利は民智が開き、教化が進むことによると彼は指摘し、中国の智における改革進歩を促しそうとした(6)。

華夷優劣論を打ち破ろうとする嚴復の一連の論述は大きな影響を及ぼしたが、中国人の危機感は滅種の方に傾き、「種族」を軸とする思考様式をますます強めた。日清戦争後、華夷優劣論は逆転し、人々の認識の中で、白色人種が黄種(中国人種)にとって変わって優秀人種となった。たとえば、劉師培は、「西洋人の東方進出以後、アジア人種が劣り、欧州人種が優れ、亡国は憂慮すべきであるが、亡種はもっと憂慮すべきことである」と述べたように、(7)亡国より滅種の方がより深刻な危機として認識されたのである。そこで、中国人種の滅亡の危機に直面して、如何に優秀人種としての質を取り戻し発展するのが、当面の急務とされた。この雰囲気広がっていく中で、優劣意識も文明と野蛮という言葉と結び付けて表現され、文野優劣という構図で人種を捉える傾向も現れた。たとえば、梁啓超は「今の中国から泰西を見れば、固より中国は野蛮である。今の中国から、苗黎猪獠、アフリカの黒奴、アメリカの紅人、マレーの褐色人を見れば、中国は固より文明である」という論を發した(8)。ここで「苗黎猪獠」も挙げられているように、中国域内の一部の少数民族も異種の野蛮人と見なされている。

二、人種と文化をめぐるアイデンティティの確認

中国人をめぐる人種論が展開されたのは、とくに戊戌変法挫折後であった。梁啓超は、1899年「中国人種の将来を論ず」を書いて中国人種の長所を分析したが、(9)唐才常は、「通種説」を唱え、黄色と白色との人種混血によって中国人種の改造を主張した。(10)しかし、混血による人種改造説はそれほど影響力がなかった。むしろ自らの人種を貴ぶ主張が有力となった。中国の人種について、そもそも嚴復は中国域内の満、蒙、漢などを皆黄種に帰属したが、当時、革命派をはじめ多くの方は、黄種という概念を用いながら、華夏文明を持つ漢族に中国人のアイデンティティを求めた。自らの人種を漢種、漢族、華夏族などの言葉で表現し、中国人種の起源の研究が盛んに行われた。

中国の人種と文明の起源について、早くも17世紀のヨーロッパにはエジプト起源という「西來說」があった。19世紀には、フランスの漢学者Terrien de Laconperieはバビロン起源という「西來說」を主張した。また、日本の学者(有賀長雄ら)にはパミール・崑崙山起源説があった。他の中央アジア起源説なども含めて、これらは「西來說」に属する。このほかに、アジア南部説、アジア北部説、アジア東部説、アメリカ渡來說などがあった。中国人自身の研究は西欧や日本の学説から大きな影響を受けた。その諸説の中で、最も中国人に受け入れられたのは、パミール・崑崙山説とバビロン説であった。西方起源説によって中国人種を高貴人種の子孫として説明し、民族の自尊心を高めようとしたのである。

梁啓超や劉師培らはパミール・崑崙山説の擁護者であった。梁啓超は1901年に書いた「中国史叙論」に「人種」という節を設けて、中国の人種を大きく六つに分類した。その中で、苗種はアメリカの紅人やオーストラリアの黒人に相当する野蛮種族と見なされる。漢種は苗種や蒙古種など五つの種族と異なって、黄帝を祖とする文明人種の子孫である。梁は黄帝が崑崙山に起こるとする漢種起源説を取る。それによると、黄帝はパミール高原から東へと中国に入り、黄河流域に住んで子孫を發展し、輝かしいアジア文明を作り出した。「漢種」は一括して黄種に属される。(1)劉師培も『攘書』において、漢族は西土に起こり、高く聳え立つ崑崙山はその発祥地であると述べ、中国の典籍を引用して、この点の考証を試みた。(2)

章炳麟をはじめ蔣智由、夏曾佑、宋教仁らはバビロン説の擁護者であった。章炳麟は、Laconperieのバビロン起源説を導入し、世界古代文明の発祥地と目されるバビロンを、華夏族(漢族)祖先・黄帝の起源地とし、黄帝が東へ進み、黎・苗など中国の土人を南方に駆逐し、自ら一民族を形成して輝かしい文化を作り、他の野蛮族と区別すると語った。(3)章は古文経学知識を発揮して、中国人種のバビロン起源説を論証しようと努力した。

これらの西方起源論は必ずしも確実な根拠に基づいたものではないが、華夏民族と西洋民族が共に優等であることを論証し、西洋の種族主義による黄色人種差別に反発し、中国人の自信を付けるためであった。

その論証法においては、最も影響力があった章炳麟も劉師培も、古文経学の「華夷の弁」を旨とし「姓氏学」の方法によって漢族の源を探ったのである。「種姓」という概念がよく用いられたように、主として共通の祖先を柱とする氏族や部族への考察であった。章炳麟の「序種姓」はもちろん、劉師培の『攘書』も、姓に関する考察が大部分を占めている。ただし、章炳麟は『世本』という中国最古の氏族系図に拠っただけでなく、諸族の帰順や漢族への同化を記載した『堯典』をも拠り所とした。また、『堯典』以後について、北魏時期や唐代および明朝初期における漢族と北方諸民族との融合、「殊族を併せて包み、種姓を和合する」という歴史を語った。これをもって、華夏族を諸族融合の「歴史民族」として説明しようとした。(4)この点は旧来の華夷弁別とは違っている点である。それにもかかわらず、「種姓」が柱とされたため、後に嚴復はこのような民族主義を宗法の旧習(宗族体系に基づく共同体のあり方)として批判した。

人種の源流について、共同祖先の探究ばかりでなく、「種族」の性格や文化が最も重視された。1902年梁啓超はまた、「歴史と人種の関係」を論じ、「歴史とは人種の発達と競争を記述するものに過ぎない」とした。彼によれば、歴史的な人種と非歴史的な人種がある。前者は自ら凝集できる人種であり、後者は自ら凝集できない人種である。凝集する人種は他の人種を排除し、さらに本種を拡張して他種を侵略することができる。歴史的人種といえるものは黄色と白色の二つの人種だけである。また、同じ歴史的人種にしても、世界史的と非世界史的との区別がある。世界史的人種とは、その文化と武力が本国域内や本国の子孫に及ぼすばかりでなく、外へ拡張し全世界の人類にその影響を及ぼすものである。今、白色人種は世界唯一の主人公である。(5)

漢族アイデンティティに自信と団結精神を持たせるために、共同の歴史記憶を作る動きもあった。その中で、侵略と征服の能力を民族の優越性として肯定する説さえ現れた。たとえば、梁啓超は最初に中国民族の文弱性格、対外競争に長けない経験に痛恨と屈辱を感じ、「四千年中国は北方の賤種の侵略を受けてきたが、劣敗の場合は九を占め、優勝の場合は一にも及ばなかった」と嘆き、その中で僅か趙武靈や秦皇、漢武、宋武などの英雄がいたとし、「黄帝以後第一偉人・趙武靈王伝」を書いてその事績を記した。(6)後にまた、「中国殖民八大偉人伝」を書き、かつて南洋(東南アジア)に殖民建国を行った広東・福建出身者を偉人として記した(7)。宋教仁は、漢族を「東洋文化の主人公」と主張するばかりでなく、侵略精神を有する民族とし、黄帝以来の漢族の征服拡張の歴史を描いて民族先祖の偉業とし、『漢族侵略史』の執筆をも企画した(8)。

革命派において、黄帝は高く尊ばれた。康有為をはじめとする立憲派は孔子紀年を主張するのに対し、劉師培は黄帝紀年を主張し、(19)宋教人ら革命派の人々に擁護された。1905年『民報』創刊の巻頭に、「中華民族開国の始祖」として黄帝の肖像が載せられた。中国同盟会も中華民国成立まで黄帝紀年を用いた。もとより、文化への関心は侵略と征服の力が主ではない。敵復の亡国滅種説から影響も受けて、西洋の「力」も「文」も勝っていることに関する敵復の説に共鳴し、華夏族の文化が廃れていることはより深刻な危機とされた。1905年に国学保存会が設立され、『国粹学報』が発刊された。その発刊「叙」において、「学が亡びれば国も亡び、国が亡びれば族も亡びる」という認識が表明されている。また「日本の維新は藩を帰し幕を覆させた。国を挙げて風靡し、欧化主義が一時滔滔たる勢いを見せたが、三宅雄次、志賀重昂らは雑誌を設けて国粹保存を唱えた。而して日本主義は成立した。ああ、学界の国界に関わる重要さはこれほどである」と書かれている。(20)国粹という言葉は日本から取り入れたのであり、日本の国粹思潮からも影響を受けたのは明らかである。ただし、中国の国粹派は欧化と立ち向かうより、西洋文化との融合によって華夏文化の再生に力を入れようとした。

以上述べた漢族の人種を自ら尊ぶという現象は、中国は西洋列強の侵略を受け、人種的にも差別されている背景の下で発生したものである。しかし、西方起源説を借りて漢族の源を古代世界文明の発祥地に求め、人種的に西洋人と同源にするのは、危険な落とし穴に嵌まる。というのは、黄帝が西方から来て中国の土人を征服し、漢族文明を作った殖民英雄であることは認められれば、今や東方の中国を侵略し殖民開拓しようとする西洋列強の狙いを正当と認めることにもなる。また、約200年前満州族が漢族の地を侵攻し、征服王朝を作ったことにも正当性を与える。この問題は早いうちに意識されて、多くの人が反省に転じた。たとえば、章炳麟は1907年も翌年も『民報』の論説において、漢族西方渡来の説を歴史的根拠の欠如として否定した。(21)また、1914年『滄書』の第二修訂版として『検論』を作る時、バビロン説など漢族西方起源説についての内容を全部削除した。梁啓超はもとより、当時この説を熱烈に擁護した革命派の人々も、反省と訂正に転じた。

三、民族主義と「種族」革命としての排満

民族という言葉は、近代国家形成と関連して使われたのは、戊戌変法からであった。康有為は「種族」に拘らず、近代国家の視野から民族概念を用いて、「東西各国が強い所以は、その政治の善や兵砲の精にあるよりは、拳国の君民を一体に合して心をつにするとところにある。……近代欧米は、とくに民族の政治に留意し、凡そ言語や政治習俗を同じ国民にして合一に務める。……民をつに合わせ、憲法を立てて同じ政治を受け、国家によって議を合意し、司法によって民を保護し、責任政府によって政治を行うのである」と説いた。(22)この意味での民族は、国民に関する敵復の捉え方と共通する部分がある。

この枠組みの中で、「中夏をはじめ蒙古準回衛藏を兼ねた大一統」を採った清朝がなお満漢を区別しているという現状は、列強の侵略が迫ってきた当今では特に問題であると康有為は考え、「拳国の人心の合一を対外の政策とすべきであり、一つの国民の中で異同を差別すべきではない」として、「満漢を分けない」ことを唱えた。しかも天子の宗族交代によって絶えず変わる王朝号を止めて、中国の諸民族を包括した中華という国号を採用するよう提案し、「統一を尊び大同を行う」ことを主張した。(23)その伝統的な理論根拠は、華夷区別の固定化とは違ったもう一つの中国思想の流派である今文経学に基づいた。『春秋』の義は「唯徳を是親しむ」。中国は徳を失えば則ち夷狄になり、夷狄は徳を持てば則ち中国になる」という公羊学思想を引証し、満州族王朝のままの立憲を力説した(24)。康有為の満漢一体の主張は、諸民族を同国民として団結するという統合構想から提起されたのである。国民団結のアイデンティティは「種族」に求めるのではなく、立憲政治に読み替えられた「徳」に求めるのである。

康有為の門下生・梁啓超も、民族関係について師の康有為と同じく、公羊学の論拠によって満漢を分けず、満州族王朝の立憲君主制を唱え、「中国の保全は皇帝に頼らなければならない」と主張していた(25)。また、後に排満を激しく主張した章炳麟も、戊戌変法期においては、康有為の思想に賛同して満漢の団結を主張していた。

もちろん、「種族」を軸として民族の危機を捉える思想が同時に存在した。すでに述べた国粹派をはじめ革命派はこの思想の担い手であった。この考え方は、満州族と漢族との「種族」的差異を強調し、優秀人種だっ

た漢族の衰微は満州族の支配によってもたらされたとする。この論理において、満州族排除の「種族」革命による建国が唱えられた。最も早くこの構図で中国の危機を捉えたのは孫文である。

1894年、日清戦争で清朝の敗勢が現れた頃、孫文は李鴻章に変法を進言して聞き入れられず、ホノルルへ赴いて興中会を設立した。「ホノルル興中会章程」で「堂々たる華夏は隣邦に軽蔑され、文物冠裳も異族に侮辱されている」と書き、また「ホノルル興中会盟書」で「韃虜を駆除し、中華を恢復し、合衆政府を創立する」と宣言した²⁶⁾。「韃虜」は満州族を指し、中華は華夏とも言い、漢族に限るものである。孫文は満州族を中華以外の異族であり中国人ではないと見なした。1897年、革新党を代表してイギリスに善意の中立を呼びかける論文で、「中国人と中国政府とは同義語ではないことを忘れないでほしい。帝位と清朝の一切の高級文官武官職位は皆外国人に占められている」と指摘し、現実の中国の腐敗を満州族王朝によるものとし、中国人の前途・希望とはっきり区別した。そして「今の極めて腐敗した統治を倒して才徳兼備の政府を建てなければ」、「本物の中国人によって純潔な政治を樹立しなければ、如何なる改進を実施してもまったく不可能である」と主張し、満州族を「本物の中国人」と前途有望の中華（漢族）から除外して考え、腐敗した清朝を倒す共和革命を説いたのである²⁷⁾。この頃の孫文においては、中国人のアイデンティティを漢族に据え付けたのである。

このような「種族」革命論は、まもなく民族主義と結びつけられた。中国において民族主義は20世紀初頭、まず梁啓超によって唱えられたのである。梁啓超は1901年に書いた「国家思想變遷異同論」で、ブルンチュリ(J.K.Bluntschli 1801~81)の国家学を紹介しながら民族を軸として国家を解釈した。彼によれば、欧米諸国において民族主義は18世紀後半に芽生え、19世紀に全盛を迎えたが、民族帝国主義は19世紀後半に芽生え、20世紀に全盛を迎えた。当今の時代は民族主義と民族帝国主義の活劇場である。そこで、「民族主義は世界で最も光明、正大、公平の主義であり、他民族による我が自由への侵害を許さず、また他民族の自由をも侵害しない」と主張し、民族帝国主義の強権による侵略に直面し、「速やかにわが国自身の民族主義を育成して之に抵抗するのは、今日わが国民の汲々として努めるべきことである」と説いた²⁸⁾。

1903年『新民叢報』に載せた「政治学大家伯倫知理(ブルンチュリ)之学説」においては、まず国民を「一定不動の全体」、「法律上の一人格」と定義し、ルソー「民約論」のような社会と区別する。また、民族と国民を区別した上、民族を国家形成の肝心要素とし、とくにその「族粹」、「固有の精神」を重視する。多民族の国家については、一つの有力民族を中心として諸民族を統御する必要性を強調する。そして、中国の現実には一つの強力民族を中心とする民族建国のあり方を適用する。その中で、中国域内の諸民族に対する漢族の「小民族主義」を唱え、同時に、諸民族を合わせた「大民族主義」を提起し、漢族が「大民族」の組織者になるという民族建国論を主張した。²⁹⁾「小民族主義」の提唱は、今まで遵奉してきた師・康有為の大同思想を捨てたことになる。この時は、「趙武靈王伝」や「中国殖民八大偉人」を書き記す頃であって、梁の大同思想の放棄を物語っている。また、排満論とは違うものの、民族の敵愾心を呼び起こすために、梁啓超は排満をも戦術として認めたのである。

梁啓超の唱えた民族主義は、排満革命に理論的資源を与えた。最も激烈な排満論者だった章炳麟や劉師培らをはじめ革命派の人々は、当今の世界における最も正大公平の主義とされる民族主義を旗印として掲げ、排満革命を主張したのである。もとより、排満という「種族」革命へと発展したのは、20世紀初頭の中国が置かれた状況に関わっている。帝国主義侵略による危機ばかりでなく、清朝の腐敗および列強侵略に対する抵抗の無力という二重の危機が、戊戌変法の弾圧と義和団事件を経て、多くの知識人に認識された。しかも、天下社会に慣れてきた中国民衆に国家意識が乏しく、ナショナリズムが生じ難いという現状において、排満は一つの政略として考えられた。清朝以来、漢族への差別政策による満漢問題が持続してきたため、排満は民族の敵愾心を喚起する有効なスローガンとして使われた。章炳麟、劉師培ら国粹派の中心人物には、明末清初に満州族の武力征服に抵抗して惨烈な経験を受けた地域の出身者や、学術流派において反満思想を受け継いだ人々が多かった。彼らは排満革命の主要な唱道者となった。

章炳麟は戊戌変法挫折後、しばらく孫文の「逐満」と康有為の「保皇」の間で迷っていた。一方では、中国の異民族を異種の犬羊狼鹿とし、これと対照して、黄帝を祖とする漢族の優れた文明を語り、華夏は欧米と同様に徳慧術知があると説き、またアジアにおいて「礼儀冠帯之族」は西に中国があり、東に日本があるとした。³⁰⁾

他方では、「客帝論」を發表し、異国の人材を客卿として登用する古代の習慣に擬えて、満州族皇帝を「客帝」として期待を託した³¹⁾。1899年『清議報』に載せた「客帝論」は、1900年春出版の『煇書』初刻本に収められた。しかし義和団事変後、「客帝」への期待が破滅し、満漢一体の思想を誤りとし、満漢を区別して同じ「族類」の固結を進めるとする主張に転じた。1904年『煇書』重訂本を出版する時に、「客帝」など数篇を削除した上、『「客帝」匡謬』（『客帝』の間違いを正す）を入れた。

漢族のアイデンティティを確立するために、当時、漢滿を厳格に区別し、種族の源から漢と滿との同種関係を否定する説は多かったが、漢滿は同じ黄種であるという否定し難いジレンマもあった。そこで、章炳麟は「種」と「族」を二つの次元に分けて、漢と滿を同種としながら同族とせず、むしろ漢人と日本人を同族とするという「日親滿疎」論をも語った³²⁾。1903年に章炳麟が書いた「駁康有為論革命書」は大きな影響をもたらした。そこで章は、梁啓超の「民族主義時代」説を用い、「今日は固より民族主義の時代であって、滿と漢を混淆して同じ器に燻ることができるのか」と康有為に問い詰め、満州族による漢族抑圧を「種族」の仇として強く強調し、「漢族が満州を憎むのは其（満州族）の全体を憎むべきである」とまで言った³³⁾。

また、康有為は、「漢滿を分けない」理由を説明するために、中国南方の諸異族が華夏族と雑居しているという事例を挙げ、華夷の弁に拘らない伝統を主張したが、これに対して、章炳麟は『煇書重訂本』の「序種姓」に述べた「歴史民族」をもって次のように反論した。「近世の種族弁別は、天然民族ではなく、歴史民族を界とする」と。また、中国歴史において南方の諸異族がすでに漢族に同化していること、これに対し、満州族が相異の文化で中国を統治し、辮髪を押し付けたり漢族を差別したりすることを語った。³⁴⁾章の「歴史民族」説は、漢族を複数の「種族」が華夏文化に同化された共同体とし、これによって、満州族を徹底的に異族として区別するという、新しい「華夷の弁」である。

鄒容の『革命軍』（1903年）も、排滿民族主義を唱え、漢滿の厳格区別を強調する著述として大きな影響を与えたものである。鄒容は満州人の驅除を、「わが文明の祖国を回復し、わが天賦の権利を回収し、わが生来の自由を挽回し、一人ひとりの平等の幸福を勝ち取る」こととして、排滿種族革命の喚声を発した³⁵⁾。排滿と漢族政權樹立の理由としては、「世界で少数人が多数人に服従し、頑迷な人が聡明な人に服従する理しかない」こと、一国の政權は自民族が執るべきであって異族に執られてはならないことを挙げている。彼は満州族の専制と腐敗無能を批判すると同時に、漢族が国家観念も種族観念も自立観念も欠如し、容易に異民族の「順民」になることを嘆き、これを奴隸根性として退ける。さらに「世界人種の公理」として「人が自らの種を愛し、必ず其の内で固結し、外には排斥すること」を主張し、「種族」観念によって「漢種」意識を強化させるよう力説する³⁶⁾。こうして、満州族人種の消滅を公理として唱えながら、長期的に異族の支配に服従する中国人の「奴隸根性」を退けて民族主義を呼びかけた。章炳麟はこの衝撃的な『革命軍』のために序文を書いた。

1904年、革命派と保皇派と論戦の最中、孫文は「駁『保皇報』書」を書いて、「異種を保ち中華を奴隸にするのは、愛国ではなく害国である」と言って保皇論を批判した³⁷⁾。また列強諸国に向けて、「支那問題の真解決」を發表し、「満州政府と支那政府とは区別すべきものである」と断り、政治の腐敗暗愚そして義和団式の排外主義を皆満州政府の問題としてその罪を列挙し、漢族が必ず失った国を取り戻し、東アジアないし世界の平和を建設するために努めると訴えた³⁸⁾。この革命構想には、満州と中華を区別し、中華を漢族に限定し、「腐敗暗愚」の満州と「文明平和」の中華とを対置する構図が示された。

要するに、自国が異族に支配されることと、文明が野蛮に支配されることに対する抵抗が、排滿革命論に共通した理由である。その民族主義は漢族への同化による単一民族国家という傾向を示しており、ナショナル・アイデンティティの「種族」性と文化性が顕著に現れている。

四、嚴復の思想との応酬

以上のように、「仇滿」、「討滿」、「排滿」の「種族」革命論が大勢に唱和され、日に日に高まった中で、1904年、嚴復は『社会通詮』（E.ジェンクス『社会通史』の翻訳）という訳著を出版した。その訳文間に附した評語において、宗法（宗族的な秩序体系）を軸とする「種族」思想は近代国家形成を妨げる要素であって脱却すべきであるとし、排外主義や排滿民族主義を明確に批判している。

中国社会は宗法と軍国を兼ねている者であり、そのあり方も国家より種族を中心として考える。満人が中国を支配してきた三百年を見て、満漢の種界がなお歴然と存続している。……今日の党派を見れば、新旧の相違があるとはいえ、民族主義においては謀らずして一致する。今日は社会の凝集を言い、明日は排外を言い、甚だしい場合は排満を言う。軍国の事を言って人々の自立を希求する人が殆んど無い(39)。

ここで、嚴復が指摘している当時流行の民族主義は、近代的ナショナリズムと違って、中国の宗法を引きずってきた「種族」中心の旧習であり、近代的改革に潜り込んだ宗法の変種である。彼は中国社会にしがみ付いている宗法的旧習を慨嘆し、宗法の閉鎖性を指摘し、このような民族主義では中国を優れた近代国家にすることができないと批判した。また、同年4月、嚴復はまた『大公報』で「読新訳甄克思(ジェンクス)『社会通詮』」を発表し、当時流行の民族主義を批判し、「中国が国際社会に自立し均衡を取ろうとするならば、必ず宗法を脱却してはじめて可能となる。……徒に民族主義を執って排外を唱える者は断じて救亡に有益ではない」と述べた(40)。

『社会通詮』と嚴復の上述の理論は大きな影響を及ぼし、革命派の排満宣伝を相殺する役割を果たした。章炳麟はこれに焦慮し、『社会通詮』商兌」という長文を書いて反論した。そこで章は、嚴復が若い内に西側を遊歴したため「黄人を見下げ、満と漢を同じ穴のムジナと見なす」と言い、またジェンクスが中国について知らず、言っていることも中国に合わない指摘した。さらに、中国において「宗法」は春秋以前のことであってその後のことに適用できないと論証し、また、民族主義は19世紀以来西欧諸国に存在する新しいことと主張し、「数国の同民族が合を求め、または一国にある異民族が分を求める」という現象を挙げ、「イタリアが同族を合して王国を建て、ドイツが同族各部を集めて連邦を為し、これは同民族が合を求めることである。アイルランドがイギリスに、ハンガリーがオーストリアに分離を求め、これは異民族が分を求めることである」と説明した。(41)

結語にかえて

もとより、嚴復の理論および他のいくつかの思想と交錯している中で、「種族」を軸とする民族主義は変化を見せた。たとえば、孫文は、1906年東京での『民報』創刊周年祝賀会において、民族主義について種族主義的な排満論を修正し、次のように述べた。

民族主義は必ずしも異なる民族に遇えば排斥することではなく、異なる民族が我が民族の政権を奪うのを許さないことである。というのは、我が漢族は政権を持ってはじめて国があるのであり、もし政権が異なる民族に握られたならば、国があってもそれは我が漢族の国ではない。……惟これ、民族革命は満州民族を尽く消滅するという説を聞いているが、この話は大いに間違っている。(42)

また、清朝打倒後、孫文は「五族共和」(43)を説くようになった。しかし、中国の諸民族を同化して一つの「国族」を形成するという主張こそ、孫文の思想の帰結であった。(44)結局、「五族共和」も含め、孫文において、漢族への同化による均質民族の建国という考え方は必ずしも変わらなかった。

他方、かつて排満革命の先頭に立った章炳麟も劉師培も、1907-08年頃に排満を放棄した。1907年、日本の社会主義から影響を受け、幸徳秋水らと亜細亜和親会を結成した。劉師培は、アジア諸国が欧州列強の侵略に直面して力を合わせて抵抗すべきこの時、同国の満州族と殺し合うのは間違いであるとして、排満民族主義への反省を表した。(45)章炳麟は革命派と別れ、1907年「国家論」で、個人を真とし団体を幻として国家の価値を相対化しながら、侵略圧迫を受けている弱国の抵抗に賛成した。また1908年「四惑論」で、進化や国家などの近代諸観念への惑溺を指摘し、個人の自立を真価として主張した。(46)清末期に最も目まぐるしく変化したこの二人は、国粋保存の点では一貫して変わらなかった。中国の士人には、中国を文化の集合体として捉え、自らを文化の担い手として責任感を持つ伝統があった。辛亥革命を経て「種族」論が克服されつつ、ナショナル・アイデンティティは文化の面に重点を移した。

注：

- (1) 中国の伝統経学には、古文経学と今文経学という二つの流派がある。古文経学の民族観は『春秋左氏伝』に理論根拠を求め、華夷之弁を重視する。今文経学のそれは『春秋公羊伝』に理論根拠を求め、諸民族を包括した「大一統」を重視する。
- (2) 「原強」『嚴復集』中華書局1986年、第一冊、8-9頁。
- (3) 同上、5頁。引用の中の()の部分は、筆者が加えた注釈である。以下、同様。
- (4) 同上、10-12頁。
- (5) 『天演論』、『嚴復集』第五冊、1331-1333頁。
- (6) 「保種余義」、『嚴復集』第一冊、86-87頁。
- (7) 劉師培「白人への侵入」、『中国民族誌』(1903年中国青年会出版)。
- (8) 梁啓超「論中国宜講求法律之学」、『飲氷室文集』一(『飲氷室合集1』、中華書局1989年)94頁。(『湘報』第五号、1898年3月)
- (9) 梁啓超「論中国人種之将来」、『飲氷室文集』三(『飲氷室合集1』)48-54頁。
- (10) 唐才常「通種説」、『唐才常全集』中華書局1980年、101-102頁。
- (11) 梁啓超「中国史叙論」第5節「人種」、『飲氷室文集』六(『飲氷室合集1』)6-8頁。
- (12) 劉師培「攘書」、朱維錚執行主編『劉師培辛亥前文選』三聯書店1998年、9-12頁。
- (13) 章炳麟「序種姓上」、『煇書重訂本』、『章太炎全集(三)』上海人民出版社1984年、170頁。
- (14) 同上、170-172頁。
- (15) 梁啓超「歴史与人種之關係」、『飲氷室文集』九(『飲氷室合集1』)11-20頁。
- (16) 梁啓超「黄帝以後第一偉人趙武靈王伝」、『飲氷室專集』六(『飲氷室合集6』)1-7頁。
- (17) 梁啓超「中国殖民八大偉人伝」、『飲氷室專集』八(『飲氷室合集6』)1-5頁。
- (18) 宋教仁「漢族侵略史・叙例」、陳旭麓主編『宋教仁集』上冊、中華書局1981年、2-6頁。
- (19) 劉師培「黄帝紀年説」(1903年)、朱維錚執行主編『劉師培辛亥前文選』3-7頁。
- (20) 「国粹学報叙」、『国粹学報』第1年第1期、「三宅雄次」は三宅雄二郎の誤植である。
- (21) 章炳麟「定復讐之是非」、『民報』16号、「排滿平議」、『民報』21号。
- (22) 康有為「請君民合治滿漢不分摺」、『中国近代史資料叢刊・戊戌変法(二)』、237頁。
- (23) 同上、238、240頁。
- (24) 康有為『春秋董氏学』卷六下。
- (25) 梁啓超「論保全中国非頼皇帝不可」、『梁啓超文集』、65-68頁。
- (26) 孫文「ホノルル興中会章程」、孟慶鵬編『孫中山文集』團結出版社1997年、下冊、926頁。「ホノルル興中会盟書」、同上、927頁。
- (27) 孫文「中国之現状与未来一革新党呼吁英国保持善意的中立」、『孫中山文集』上冊、424-425頁。
- (28) 梁啓超「国家思想變遷異同論」、『飲氷室文集』六(『飲氷室合集1』)19-20頁。
- (29) 梁啓超「政治学大家伯倫知理之学説」、『飲氷室文集』十三(『飲氷室合集2』)68-76頁。梁啓超は日本の訳書を経由してブルンチュリの思想を紹介したのである。
- (30) 章炳麟「原人」、『煇書』、『章太炎全集(三)』21-22頁。
- (31) 章炳麟「客帝論」、『煇書』、前掲書、65-69頁。
- (32) 章炳麟「正仇滿論」、王忍之等編『辛亥革命前十年間時論選集』第一卷上冊、99頁。
- (33) 章炳麟「駁康有為論革命書」、『章太炎全集(四)』175頁。
- (34) 同上、173-174頁。
- (35) 鄒容『革命軍』、『中国近代史資料叢刊・辛亥革命(一)』、349頁。
- (36) 同上、336、352-364頁。
- (37) 孫文「駁『保皇報』書」、『孫中山文集』、上冊、463頁。
- (38) 孫文「支那問題的眞解決」、『孫中山文集』、上冊、470-473頁。

- (39)『社会通詮』「評語」、商務印書館1981年、115頁。
- (40) 嚴復「読新訳甄克思『社会通詮』」、『嚴復集』第一冊、151頁。この論文は同年6月『外交報』にも転載された。
- (41) 章炳麟「『社会通詮』商兌」、『章太炎全集（四）』、322-324、334頁。
- (42) 孫文「東京『民報』創刊周年祝賀会での演説」、『孫中山文集』、上冊、22-23頁。
- (43) 「五族」とは漢、満、蒙、回、藏（チベット）の五民族を指す。
- (44) 孫文「三民主義」『孫中山文集』上冊、114-115頁。
- (45) 劉師培「上端方書」、朱維錚執行主編『劉師培辛亥前文選』、97頁。
- (46) 章炳麟「四惑論」、「国家論」『章太炎全集（四）』、443-465頁。